＜前回：告白文学の系譜＞

・「宗教と文化」:「宗教から文化へ」の経路としての「告白」
　　宗教が言語にもたらされるとき。

（１）告白文学の問題

１．告白文学とは？　アウグスティヌスやルソーの『告白』、あるいは近代日本の私小説
　　自伝文学

２．告白とは？　　だれが、だれに、何を、どのようにして

（２）告白文学の源泉としての聖書

３．詩編：祈りという形態における告白
　　個人が神に　→　人格的な関わり・応答関係（ブーバー：「我－汝」）

４．罪は告白されるときに言語化される（リクール）。→告白の現象学
　　・罪の表出の原初形態としての告白
　　・人間のもっとも内面的な秘密の事柄は告白を求める

５．祈り（祈祷論）：讃美、感謝、懺悔＝告白、祈願、執り成し
　　・なぜ祈る必要があるのか。神が全知全能であるならば。
　　・何を祈るべきか。　　・祈りないときにどうしたらよいのか。
　　・祈りは聞き届けられるのか、聞き届けられない祈りはどうなるのか。

６．オリゲネス『祈りについて』

・言葉の選択と吟味、内容の反省

・「文学としての祈り」（関根正雄『旧約聖書文学史』上下、岩波全書）

６．書簡（パウロ書簡）：手紙に挿入された告白
　　神と自己との関わりについての証言という形態を取る。

７．書簡の受け手、テキスト化：特定の聴衆から一般の読者へ
　　↓

（３）文学ジャンルとしての告白

８．山田晶「二　告白と言葉　告白はなぜ言葉によらなければならないか」（『アウグスティヌスの根本問題』創文社、1977年）。

「「告白」という犠牲は、「舌」という手を以てささげられるのである。」（28）

「告白」「罪の告白の場合に confiteri という動詞を用いているのであって、そのかぎりにおいて、「告白する」とは「懺悔する」ことであるといってよい。それにもかかわらず、・・・「告白」と「懺悔」を同一視することはできない。・・・神を讃美する場合・・・「告白」は「懺悔」ではなくむしろ「讃美」なのである。」（29）

「confiteri というラテン語の本来の意味は、「あることがらをあるままに承認し、かつその承認を表明すること」」（30）、「この意味で告白は知性認識を前提する。」（35）

「神の前において意味があるのは、語られることがらよりもむしろ、語るときのわれわれの態度である。」「回心」（36）

「書くということは、内なる言葉を単に神に伝えるためだけでなく、人々にも伝えるためである。」（38）、「自己を語るためではなく神を語るためでった。」「喜びと讃美とを人々の間にひき起こすこと」（40）

「告白がそれによってなされた「内なる言葉」は、音声の衣をまとい、「外なる言葉」として、人々の世界に伝えられねばならなかったのである。」「人間の神に対する全き帰依と礼拝の心が表現されるため」（41）

９．再度、パウロ。

「10:8　では、何と言われているのだろうか。「御言葉はあなたの近くにあり、／あなたの口、あなたの心にある。」これは、わたしたちが宣べ伝えている信仰の言葉なのです。9

口でイエスは主であると公に言い表し、心で神がイエスを死者の中から復活させられたと信じるなら、あなたは救われるからです。10　実に、人は心で信じて義とされ、口で公に言い表して救われるのです。」（ローマ 10 章）

内なる言葉（神から・神へ）→外なる言葉（人々へ）

９．アウグスティヌスの『告白』

作品となった「告白」あるいは「告白」として提示された思想

10.「自伝」としての告白：自己同一性の確認と提示＝自伝

神へ、人々へ、自分自身へ。

＜詩編 51 編＞

1 【指揮者によって。賛歌。ダビデの詩。

＜ローマの信徒への手紙＞

7:14 わたしたちは、律法が霊的なものであると知っています。しかし、わたしは肉の人であり、罪に売り渡されています。15 わたしは、自分のしていることが分かりません。自分が望むことは実行せず、かえって憎んでいることをするからです。…… 24 わたしはなんと惨めな人間なのでしょう。死に定められたこの体から、だれがわたしを救ってくれるでしょうか

＜アウグスティヌス『告白』＞

第一巻第一章

一　偉大なるかな、主よ。まことにほむべきかな。汝の力は大きく、その知恵ははかりしれない。

しかも人間は、小さいながらもあなたの被造物の一つの分として、あなたを讃えようとします。それは、おのが死の性を負い、おのが罪のしるしと、あなたが「たかぶる者をしりぞけたもう」ことのしるしを、身に負うてさまよう人間です。

・・・

よろこんで、讃えずにはいられない気持にかきたてる者、それはあなたです。あなたは私たちを、ご自身にむけてお造りになりました。ですから私たちの心は、あなたのうちに憩うまで、安らぎを得ることができないのです。

・・・

主よ、私はあなたを呼びもとめたずね、信じながら呼びもとめたい。

・・・

４．　修道制と文化構築

（1）修道的宗教性の普遍性とキリスト教修道制の起源

１．修道的な宗教生活は、キリスト教にかぎったものではなく、多くの宗教が共有する生き方、生き方の伝統である。孤独な超人的な修行（独居）と共同的な修行（共住）

２．キリスト教修道制の源泉・起源。

個々の宗教の修道制にはそれぞれ特有の歴史的起源が存在する。ユダヤ教からキリスト教へ（？）。

３．宗教的生の形態としての修道

・独居と共住（孤独と交わりの相補性）

「独りで住む者」、「隠れ住む者」　→　独住者、隠修士

「共同生活」（独住者の集団）　→　共住、修道院：エジプトのパコミオス(292/4-346)

・使徒的生活（via apostolica）の理想：キリストの福音を宣べ伝えるために、キリストのように清貧を尊び、使徒たちのように共同生活を営む。

・指導者のもとでの修養の意味：瞑想における異常心理（幻覚による精神錯乱）への対処。神と悪魔の「識別」の必要。経験者への相談。

（２）キリスト教修道制の歴史的展開――古代から中世へ

・エジプト　→　東方教会（正教）　→　西方教会（カトリック）

４．エジプト

エジプトのアントニウス(251-356)：キリスト教修道制の父

修道士の理想的模範としてのアントニウスの禁欲的生活

世俗を離れ砂漠で修養する隠修士（禁欲的行者）の散在的集団

アタナシウス(296-373)の作と言われる『聖アントニウス伝』

↓

隠修士的形態から共住生活へ（パコミオス）

共同生活の規律とそれに対する服従、清貧

修道制は、パレスチナ（４世紀のエルサレムは「聖地」となり、聖地巡礼が始まる。多くの修道院が建設。西方から、ヒエロニムスやルフィニウスらが訪れる)、シリア（シメオン）へ広がる。

５．東方修道制の伝統

カッパドキアのバシレイオス（-c.379、カエサリアの主教、カッパドキアの三教父の一人）：東方キリスト教の共住修道制の基礎を築く。三つの会則。

６．アウグスティヌス

『カトリック教会の道徳』(創文社)

『アウグスティヌス会則』の「第二会則」における労働の規定（cf.「第三会則」）

労働重視の思想：労働することを欲しない修道志願者に対して、労働の有益性を説く（『修道士の労働について』)。

７．アイルランド、学者の島

５世紀におけるパトリック（アイルランドの守護聖人）のアイルランド伝道。

↓

６世紀より、修道制の発展。厳しい修行と学問の愛好。

ペレグリナティオ（異郷滞在、異郷遍歴）：修道院長が修道院を突然譲り渡して、行き先も告げずに遠国に旅立つなどのパターン。魂の救いのために新しい故郷を求めるという贖罪的な意味を伴った禁欲的動機に基づく行為。

コルンバヌス（-615）のガリア伝道

『修道士規定』『共住生活規定』：アイルランド同様に厳格な会則。

↓

７世紀以降のガリアの修道院の発展。それに伴い（フランク王国の政治的統一と教会整備という新しい時代状況)、アイルランド系修道士の影は次第に薄れてゆく。

『ベネディクト会則』の普及。

（３）ベネディクト修道会と修道院改革の歴史

８．ベネディクト会則とグレゴリウス一世(590-604、修道士から教皇になった始めての人物)

・モンテカッシーノ修道院（525）＝ベネディクト修道会の設立。

・『ベネディクト会則』(530/534、ただし原本は喪失)

修道生活の入門という意味。入門書としての優秀さ。

東方やアイルランドの修道制のように厳格な孤独な修行を要求せず、中庸の精神で

生活し、労働や定住を義務づけることによって修道院の経済的自立を図り、共同体としての修道院の運営を機能的に組織化した。修道院の自律性を確保するとともに、西欧に形成されつつあった農村社会（世俗社会）に適応する。

↓

修道院の西欧的形態の確立。

９．クリュニー修道院(910-)

修道院の世俗化の進展に対する修道院改革運動（11 世紀のグレゴリウス改革との関係は議論が分かれる)。『ベネディクト会則』の遵守。

第二代修道院長オドー(926-942)：教皇レオ七世の特許状によりクリュニーは教皇直属→ 991 年には司教権を排除、修道院の強大な系列的組織化（修道会、第五代修道院長のオデロー)。

マリア崇拝（５世紀にビザンツで現れ、シリア、エジプトに普及、ローマには７世紀)、荘厳な典礼（音楽）

10. シトー会(1098-)：クリュニー派修道士の規律弛緩への批判。『ベネディクト会則』の厳格な遵守。清貧。クリュニーの中央集権的体制に比べ民主的な形態。『愛の憲章(カルタ・カリターティス)』

封建領主的諸収入の放棄、労働の重視（開墾)、経済的自立（修道院経済)。

額に汗する者こそが真の修道士であり、労働は神の栄光のため。

クレルヴォーのベルナール(-1153)の説教活動、異端に対応（アンリ派の異端を調査し、正統信仰に引き戻す）

11 世紀後半から 12 世紀にかけて、異端的民衆運動が西欧の各地に発生。一般の信徒集団の間にも、使徒的生活の理念が影響し、異端運動へと発展（教会の伝統的な教義や聖書解釈からの逸脱)。「キリストの貧者」、「リヨンの貧者」、カタリ派、ヴァルドー派。

アルビジョア十字軍

11. 13 世紀の托鉢修道会：民衆の宗教性のうねりに対応するために（都市、イスラーム)。

・ドミニコ会：弁舌と学問の修道士（異端の論駁、異端審問)、労働から学問へ、大学。

・フランシスコ会(小さな兄弟の修道会)：民衆の新しい宗教性を求める敬虔な運動を教会的秩序の内部に取り戻す。『第一会則』(1221 年、マタイ 19.21、マタイ 10.9-10、マルコ 8.34 を三箇条とする)、『1224 年の会則』。清貧。

・カルメル会、アウグスティヌス会

（４）アッシジのフランチェスコ(1181-1226.10.3)

「この人物は、近代的でダイナミックな中世が誕生した一二世紀から一三世紀への転換期という決定的な瞬間の只中にあって、宗教・文明そして社会を揺り動かしたのだ。」(ルゴフ、v)

教会制度の周縁に立ちつつも異端に陥ることなく、新しいキリスト教社会にふさわしい使徒的活動のモデル、托鉢修道会という新たな修道会の勃興、一種の生態学的次元におけるキリスト教霊性を豊にした。

12.「もし完全になりたいのなら、行って持ち物を売り払い、貧しい人々に施しなさい。そうすれば、天に富を積むことになる。それから、わたしに従いなさい。」

「帯の中に金貨も銀貨も銅貨も入れて行ってはならない。旅には袋も二枚の下着も、履物も杖も持って行ってはならない。働く者が食べ物を受けるのは当然である。」

「わたしの後に従いたい者は、自分を捨て、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい。」

13. キリストに倣うという生き方（清貧に生きる）
・十字架からの語りかける声、「フランチェスコよ、行って私の家を修理するのだ」。
荒れ果てた教会堂（サン・ダミアーノ教会）の修理
カトリック教会全体の、霊的な意味での再建
教皇権の絶頂期（インノケンティウス三世 1198-1216）＝危機
・「貧しい人々は幸いである」
この言葉を実践すること → 貧しい人・ハンセン病患者と共に
・謙虚で愛に生きる。怒らない・不平を言わない。
「私は、主イエス・キリストにおいて戒め、勧める。兄弟たちは、全ての高慢、虚栄、嫉妬、貪欲、現世のことについての心配とおもんばかり、そしり、つぶやきを避けるべきである。」
・神の被造物としての自然
→ 愛の交流・連帯性における交わりの対象としての自然
cf. 支配の対象としての自然（＝物）

14. フランチェスコの信仰の遺産→時代を超えて、近代、現代へ
・物質的な豊かさの中にあって、信仰的に生きる生き方。
教会権力の絶頂期におけるキリスト教的信仰の危機。
聖書のキリストに帰れ → キリストのように生きる
・信仰のことを聖職者にまかせるのではなく、信徒が自分の生活を信仰的に生きる。
「新しい敬虔」（devotio moderna）へ向かう動向。
俗人世界の宗教生活への参与の度合いが高まる、ラテン語から俗語へ
伝統的な修道会か、あるいは新しい兄弟会か
・環境危機の中で、キリスト者は自然との関わりをいかにして回復するのか。

（６）マリア崇拝と文化形成

15.「マリアについての教義のうち主なものは、（一）新しいエバ、（二）永遠の処女、（三）神の母、（四）聖母被昇天、（五）恩寵の仲介者、そして（六）処女懐胎である。
また、マリアの教義の発展の歴史的段階はつぎの三つに分けて考えられる。
１ 初期――二世紀から四世紀
２ マリア論の確立期――五世紀から十二世紀
３ マリア論の最盛期――中世の末期から反宗教改革期」（リューサー、81）

16. ニカイヤ公会議（325）：父と子の同本質
↓
マリアの位置：「神の母」、しかし、神ではない。（四）、（六）
ネストリウス（「神の母」論に反対）とキュリロス（「神の母」論を支持）の論争
エフェソ公会議（431）、カルケドン公会議（451）：ネストリウスへの異端宣告の正式確認。

17. 東方教会：聖画像崇拝禁止・イコン破壊運動に積極的→レオ３世（在位 717-741）のイコン禁止令（726。843 年のコンスタンチノープル教会会議で最終撤回）
西方教会：聖人の聖遺物の崇拝の傾向。ローマ教皇グレゴリウス３世（在位 731-741）のイコン崇拝を正式承認。

18.「聖人と並んで、あるいは聖人とは別格で、聖母マリアは古くから根強く崇拝されていた。時代より、また地域より、その崇拝の度合いや熱には差はあるが、一二世紀以降マリア崇拝は全体的に強まり、多くの教会や修道院、特に聖ベルナルドゥスの奨励によるシトー派修道院が聖母マリアに捧げられ、至る所にマリアや聖母子の肖像が飾られ、絵画が

描かれた。一三世紀にも、聖フランチェスコのフランシスコ派修道院をはじめ、マリア崇拝の熱は依然として続き、文学や演劇にも現れた。その波は一四世紀になっても続き、多くの聖母奇蹟劇（現存約四〇編）が創られ演じられた。リュトブフの『テオフィールの奇蹟劇』はそのさきがけと言える。」（原野・木俣、40）

＜参考文献＞

１．今野國雄『修道院』近藤出版社、『修道院――祈り・禁欲・労働の源流』岩波新書。
２．朝倉文市『修道制――禁欲と観想の中世』講談社現代新書。
３．戸田　聡『キリスト教修道制の成立』創文社。
４．山形孝夫『砂漠の修道院』新潮社、『聖母マリア崇拝の謎――「見えない宗教」の人類学』河出ブックス。
５．久松英二『祈りの心身技法――十四世紀ビザンツのアトス静寂主義』京都大学出版会、『古代ギリシア教父の霊性――東方キリスト教修道制と神秘思想の成立』教文館。
６．トマス・ア・ケンピス『キリストにならいて』岩波文庫。
７．エリク・ドイル『現代に生きる『太陽の賛歌』――フランシスコの環境の神学』サンパウロ。
８．レオナルド・ボフ　『アシジの貧者・解放の神学』エンデルレ書店。
９．ジャック・ルゴフ　『アッシジの聖フランチェスコ』岩波書店。
10．川下勝　『アッシジのフランチェスコ』清水書院、『太陽の歌――アッシジのフランシスコ』聖母文庫。
11．ボンヘッファー『共に生きる生活』新教出版社。
12．原野昇・木俣元一『芸術のトポス』岩波書店。
13．土屋博『聖書のなかのマリア――伝承の根底と現代』教文館。
14．R.R.リューサー『マリア――教会における女性像』新教新書。
15．Ｅ・モルトマン＝ヴェンデル、Ｈ・キュング、Ｊ・モルトマン編『マリアとは誰だったのか――その今日的意味』新教出版社。
16．馬杉宗夫『黒い聖母の悪魔の謎――キリスト教 異形の図像学』講談社現代新書。
17．池上俊一『魔女と聖女――ヨーロッパ中・近世の女たち』講談社現代新書。